

松村真司，下田泰彦，山寺慎一(著)

「在宅医療チームスタッフのための必携 薬剤手帳！」

伊藤隆夫

(船橋市立リハビリテーション病院)

本書の帯のキャッチコピーに、「本当にこんなに薬が必要なの?」、「これって薬の副作用のせい?」、「どう他職種と関わればいい?」、「薬について聞かれたらどうしよう?」の言葉が踊る。これらのすべてが訪問リハビリテーションの現場でセラピストが直面している現実そのものといえる。つまり本書の著者は3人とも医師だが、在宅の現場で実際にセラピストとチームを組んで、共に汗をかいてきた人たちなのだということがよくわかる。

ページを繰ると「総論にかえて」で3人の著者の鼎談が載せられているが、そこに明確に本書が単なる薬の紹介ではなく、在宅のチームワークを少しでも前進させたいという姿勢が伝わってくる。薬の知識というより「薬は(在宅支援スタッフの)コミュニケーションの軸の一つになり得る」という発想がきわめて新鮮であり、それこそが訪問セラピストが求めていたものだという感激に似た思いを新たにしたい。思わず「うん! うん!」と頷いている自分に気づかされた。

本書はまずすべてを一回は読んでしまうことをお勧め

めしたい。ボリュームもさほどないのと各項目の構成が読み進めやすい工夫がされている。各項目の内容をあらわすテーマがまず示され、さらに key word が示され、それが薬剤である場合には副作用について述べられている。そしてさらに本書のきわめてユニークであり、読みやすいポイントになっているのが、必ず事例の紹介がされている点であろう。このことで具体的なイメージが付きやすくなり、症状と薬との関連が見えやすくなるという効果をあげている。その後に主に薬に関する解説が続くという構成になっている。さらに「これがポイント!」という欄でトピックス的な情報も示されている。ところどころに挿入されるコラムも内訳話のような内容もあり、ほっとする効果もあげている。

とにかく中身に目を通したら、訪問かばんの中にぜひ一冊はほうりこんでおくことをお勧めする。最後に索引が載せられているので、訪問中や終了してから薬のことで問題にぶつかったら、それに関連する項目に目を通して、そこから必要があればさらに専門書で調べるなどの活用法がある。おそらくセラピストにとっては本書で十分解決法が見出せるだろうし、医師に聞くというコミュニケーションの第一歩につなげていけるのではないだろうか。

●B6 変型・168 頁・2 色刷

定価 2,100 円(本体 2,000 円+税)

2010 年 三輪書店・刊